

虹色のひろば 戦争遺跡が伝えるもの

—「誌上ギャラリー」解説—
近現代史ゼミ 内藤真治

(文中の「写真①～⑧」は本誌 2・3 ページを参照)

1 空襲

それまで聞こえていたラジオの放送が突然途切れ、警報音とともに「関東地区、関東地区、警戒警報 東部軍管区情報 相模湾より侵入したる敵 B29 爆撃機約 50 機は北方に向けて進行中なり…」。警戒警報はやがて空襲警報に変わり、間もなく胸に響くような B29 の爆音が迫って来る……

「敵機来襲」を知らせたのは全国に設置された「防空監視哨」からの情報だった(1941 年防空監視隊令)。群馬県では県庁内に防空監視総本部、前橋・高崎・渋川に監視隊本部を置いて、県内 40 ヲ所に監視哨を設置した。現在まで残っているのは写真①・②の 2 ヲ所のみである。

写真① みどり市東町花輪地内

写真② 長野原町大津地内

直径約 4m、深さ 2～3m、二重にレンガを積み、上部はラッパ状に開いている。哨員は昼は目視で、夜は爆音を頼りに敵機の接近を監視し、付設の通信室から電話で監視隊本部に報告、総本部を経て軍管区に集まった情報から警戒・空襲警報が発せられた。

夜間に監視するため「爆音による敵機の聞き分け方」が放送され、レコード(は敵性語なので「音盤」)も発売された。他県では聴覚が優れているという理由で盲学校の生徒が動員された例がある。前橋空襲では監視哨が直撃弾を受けて多数の死者が出たが、哨員の最年少は 14 歳だった。

写真③は前橋東照宮の昇格記念碑(市内大手町、県教育会館前の前橋公園に隣接)。1945 年 8 月 5 日、空襲の爆弾により傷ついた。この日、B29 爆撃機 92 機から投下された焼夷弾は 691 トン、爆弾 17,6 トンに及び、市街地の大半を焼いて 535 名の死者を出した。

右の写真は空襲から約 1 ヲ月後の前橋中心部(米軍撮影)。戦果(費用対効果)確認のため、すべての攻撃対象



について詳細な写真撮影を行った。記録はすべて米国立公文書館に保存され、直ちに検索できるようになっている。

残すべき重要な公文書さえ廃棄し、あるいは改竄するどこかの国とは大違いだ。

写真④の麻屋百貨店(市内千代田町)は取り壊されて今はない。猛火に耐えて残った建物を戦争遺跡として残すべきだとの市民の声があったが、市は取り壊して跡は現在も更地のままである。



左の写真は東京都東大和市の空襲の跡をとどめる建物だが(旧日立航空機(株)立川工場変電所)取り壊す予定だったのを、元

従業員や市民の残すべきだとの声を通して保存されている。

市の教育委員会が建てた詳しい説明板の最後には「戦後、戦争の傷跡を残す建物は次々に取り壊され、戦争に対する私たちの記憶もうすらいできています。この建物から、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて受けとめていただきたいと思います」とあって、戦争遺跡の保存についての市の見識を示している。

広島で被爆した産業奨励館いわゆる原爆ドームも、今日まで自然に残ったわけではない。放っておけばとうに崩壊したであろうドームに、何度も鉄骨を樹脂で補強するなどして残したのである。

県内に残る二つの防空監視哨は戦後、壊すには手間もかかるし邪魔でもないとたまたま残って史跡・文化財に指定されたものであり、他の 38 ヲ所についてはおよその場所はわかっても詳細は不明である。

2 地下工場と《加害》の歴史

空襲が本格化するのは44年7月、サイパン島の日本軍守備隊が全滅して米軍が飛行場を建設、本土がB29の爆撃圏内に入ってからである。当然初期の攻撃目標は軍需工場に向けられたから、群馬では太田町の中島飛行機製作所（戦後は富士重工→SUBARU）が最も早く、そして繰り返し空襲を受けている。全国各地で空襲被害を避けるため航空機製造の地下工場化が進められた。

写真⑤は利根郡みなかみ町後閑に残る中島飛行機小泉製作所の疎開地下工場の跡、45年8月までに掘削はほぼ終わり工作機械も一部搬入されたが、稼働には至らなかった。

写真⑥は利根川の河岸段丘に掘られた横穴で、高崎市岩鼻にあった陸軍火薬製造所（火薬廠）を地下に移そうとしたもの（沼田市上川田町）。作業には近くの沼田中（現・沼田高）や利根農林（現・利根実業高校）の生徒も動員されたが、敗戦まで完成には至らなかった。

労働力の不足を補うため、全国各地で中国人、朝鮮人の強制連行、強制労働が行なわれた。写真⑤の後閑の地下工場建設の前には多くの中国人が水力発電所の導水路工事に使役されている。

写真⑦はみなかみ町上牧に築いた堰で利根川から引いた水を通すため沼田の岩本発電所まで13.4kmの隧道を掘ったが、途中で赤谷川を越えるところだけ地上に現われる水路橋である（73, 1m みなかみ町黒岩）。45年2月には仮通水にまでこぎつけたが、3月10日の大空襲で東京の電力需要が激減したため発電所建設は中止され、作業に従事していた中国人は後閑の地下工場建設に振り向けられた。岩本発電所が完成し稼働するのは戦後の1949年になってからである。栄養不良と過酷な労働、さらに虐待のため、1年足らずの間に計53名の中国人が命を落とした。

写真⑧はみなかみ町（旧・月夜野町）上津にある如意寺の本堂須弥壇下に設けられ

た遺骨安置所の札。当時の住職は敵国の俘虜でも死ねば仏の前では一視同仁だとして日本人同様に手厚く葬った。遺骨は1953年に送還されたが、住職は「何年後トイエ共此札取り去ル可カラズ」と書き添え《加害の歴史》を今に伝えている。境内には「中国人殉難者慰霊之碑」が建つ。揮毫は自民党の松村謙三衆院議員。

東毛では太田市西長岡（旧・新田郡強戸村）の長岡寺にも「日中不再戦 中国人烈士慰霊之碑」がある。45年4月末、280人の中国人がこの地に連行されて中島飛行機の地下工場建設のため重労働に酷使され、わずか半年間で50人が亡くなった。碑は1977年に日中友好協会群馬県連が建立（揮毫は哲学者・柳田謙十郎）。近くの地下工場跡は地盤の崩落でまったく中に入ることは出来ない。

西長岡に連行された中国人は長野県木曽御嶽発電所の工事現場から移送されたが、高崎駅での乗り換えの情景を目撃した作家の平林たい子は戦後まもなく短編『盲中国兵』を発表した。

日中友好協会は毎年春に長岡寺、秋には利根・如意寺で慰霊祭を行っている。

全国の135事業場に強制連行された中国人は約4万人、うち6,800人以上が死亡したといわれる。生還した当人や遺族が企業や国に対し各地で謝罪と補償を求める訴訟を起こしたが、裁判所は原告の訴える過酷な労働実態を認めながらも、補償については除斥（時効）や請求権の消滅を理由にいずれも請求を却下した。日本と同じ敗戦国であるドイツが、ナチによるユダヤ人迫害に対して謝罪と補償を行っているのと対照的である。ドイツでは自国民の空襲被害に対しても補償を行っているのに対し、日本では空

襲による被害は原爆を除き「国民のひとしく忍ばねばならぬところ」（受忍義務）として何らの補償もしていない。内外共に日本という国家は無責任極まりないというべきだろう。



東京電力岩本発電所（現在も稼働中）